路上都市アルカディア

都市では、そこに住まう人々や街の様相の変化や原風景であり、パブリックとプライベートの境になる空間である。そんな空間において、私たちは土地を合理的に区画し、それらが排除された躯屈な暮らしを余儀なくしている。

そんなか、路上生活者という都市の中で最も排除される人々について考える。そう、彼らの土地の面的な概念に縛られない生活こそ、都市におけるアルカディア（理想郷）となるであろう。

【Background①　－ 都市の暮らしの変容】

「原風景っていの最後に自分の帰って行く、一緒り暮さたい最終の景色だってことじゃないですかね、」

（やすらぎの郊）より

昨今の映画において、私たちは昔ながらの街や田園風景などを見ては、感動する機会が多い。これは技術発展に伴い、我々の住んでいる都市の建物や風景が均質化し、それらの風景が暮らしの中で失われつつあるからであろうか？

そこで、私たちの暮らしに焦点を当てていこう。かつての私たちは地球環境に順応しながら、転々と暮らしていた。しかし、「土地」という概念が生まれ都市を形成し、半ば躯屈な面的な生活をしている。

そんな世の中だが、路上生活者はどうしろうと、彼らは、「都市の中」を卒業した、好奇心旺盛な的な自由で土地に縛られない暮らしである。

映画での原風景

開発により可視化する都市

都市において土地に縛られず生きる路上生活者

【Background②　－ 西成特区構想】

大阪市西成地区は、日本一路上生活者が多く治安が悪いが、歴史ある街並みを残し、人情味溢れる街となっている。しかし、現在西成特区構想により、きれいな街へと姿を変えていている。ドヤや路上生活者は減少治安は良くなっていったが、かつての街固有の特性はなくなり、時と共に「理想の街」へと姿を変えている。

【Site　－大阪市西成区萩之茶屋 1-3】

敷地は、かつて「あいりん労働センター」は、路上生活者が不法占拠して暮らす場で地域のシンボル的存在であった。

しかし、「西成特区構想」により閉鎖され、現在解体予定である。つまり路上生活者の暮らしとそのシンボル的存在が失われ、全く新しくたた分離的に後で建える街の歴史性や場所性のない環境が進んでいる。そこで、私は我々の暮らしを投影し、街のコンテクストを受け継ぐ建築を考える。

【Proposal　-都市性を交えた居場所的商業施設】

路上生活者にとって都市が、日常生活の一部として生活をしている。ならば私たちにとっての、日常生活の一部とは何か。それは、買い物や食事などの多機能を持つ商業施設と考える。そこで、街の風景をモデル化してそれらを組み合わせた商業空間を作り、そこへ住居というヒューマンスケールを組み合わせた建築によって、路上生活者のような自由で、新しくもどこか街の歴史や場所性の感じられる建築になるのではないか？

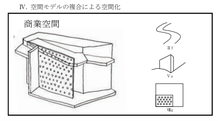
【Method ― 場所性と生活の絡み合う商業施設】

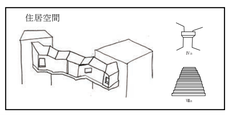
そこでネ設計では、街に残れる空間要素を抽出し、それらを空間評価していく。そして、それらを組み合わせて商業空間やそこに絡み合う住居部分を設計していく。敷地調査より、西成地区では以下のように場所ごとで様々なシーンが織りなしている。これらのシーンを空間要素として変換し、それらを組み合わせることで、住居部分と商業部分の二つを構成していく。

Ⅰ. 西成区に点在する街の風景

Ⅱ. 街の風景を抽出し空間モデル化

Ⅳ. 空間モデルの複合による空間化





【Research　－西成に住む路上生活者の実態調査】

生活の术（聚起）
都市化に伴いたのなら自然は消えたのか。
ものからの離れなら、ドヤボーに這ったのかいう
ことで、離れられない生活。
これは、これから西成の未来
所存ロドキャ化で情報とりされ、少しづつ良くなっ
て、自治の方で頑張っ自治の一部で、
めちゃくちゃ中ずいし、面倒なさ出いてっかゆ
ちこくりつとまいやつは、家住ちがって
ゴ
ミ
ゴ
ミ
ゴ
ミ
（シャルな都市（路上）
シートは固に囲まいなさと、知を行ってるだ
よ、用のたちたこと、一生ひっかけたら問題な
されいに来るとなりとう？自治にいろんなものこ
ったらハいなけど、ちはあ生きるとやいやで
す。自分のものはしまっておきたい。盗まれ
ちゃってもなりなりなっていこうそ
ま
ち
ま
ち
ま
ち